

2023年12月25日降誕日

イザヤ書 52 章 7-10 節

ヘブライ人への手紙 1 章 1-12 節

ヨハネによる福音書 1 章 1-14 節

クリスマスおめでとうございます。昨日は、主日の降臨節第4主日の礼拝をささげ、そのあと4年ぶりのキャロリング、そして、降誕日前夕の礼拝、さらには深夜の降誕日第一聖餐式と、恵み豊かな時でした。神学的にはクリスマスよりもイースターの方が重要ではあるのですが、より多くの人とお祝いができるという意味では、クリスマスの方がより恵みに満ちているといえるでしょう。今年、皆様と、コロナ禍前の東京聖三一教会の礼拝と同じような形で、主イエス・キリストのご降誕をお祝いできますこと、心から主なる神様に感謝したいと思います。

さて、本日の使徒書は、「ヘブライ人への手紙」です。この文書は、ABC年共通の降誕日聖書日課の使徒書となっています。それはこの文書が、ヨハネによる福音書と同じくらい神学的理解に基づいて、イエス・キリストについて述べているからでしょう。

この文書は、手紙と称していますが、教えと勧めが交互に記される説教ともいえる内容を持ちます。全体から見た特徴として、他の新約文書と比較して、『聖書(旧約)』からの引用が多い点が挙げられます。内容的に見ますと、キリストを大祭司と呼び、犠牲・聖所という祭儀用語が多い点が特徴です。これらのことから、この文書が、イエス・キリストと祭儀、または教会と祭儀との関連をどのように見ているのかを課題としていることがわかります。

最初の1章1、2節、「神は、かつて預言者たちを通して、折に触れ、さまざまなかたで先祖たちに語られたが、この終わりの時には、御子を通して私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者と定め、また、御子を通して世界を造られました」は、根本的な事柄をヨハネによる福音書のように明確かつ簡潔に述べています。それは、パウロ書簡や共観福音書以上に、この文書が神学的に熟慮された内容を記述していることを示します。1節は、主なる神様が、一度ではなく、様々な仕方で、つまり色々な場所で多様な方法で語られたと述べます。これは啓示の多様性を示しているといえるのですが、それは一回々々の啓示が不完全であったことということではなく、啓示の具体性を意味しているのです。啓示を受ける人間の側が不完全だったから、主なる神様は具体性をもって何度も啓示されたということです。

それは、「かつて(旧約の時)」と「終わりの時」を対比することによって啓示者(主なる神様)は不変だが、「終わりの時」に至って、啓示内容が本質的に、かつ決定的に変化したのだと記しているのです。何が本質的かつ決定的な変化したのかというと、それは、第一に「御子(イエス・キリスト)」によって、それが語られたということです。第二に、その「御子(イエス・キリスト)」は、万物相続者として子としての身分を持ち、第三に、世界創造者として役割を持つということです。

世界創造性とは、主なる神様の啓示の手段であり、造られたもの万物の相

続性はその結果です。わたしたちは、御子（イエス・キリスト）見て、その方が、復活されたがゆえに万物の相続者であると知り、それゆえに、その方が主なる神様と同じ、万物の創造者であることを知るのです。

「万物の創造者」と「万物の相続者」、この二つの関係には、「御子」が主なる神様の啓示の言葉を伝える存在であるだけでなく「知恵」そのものであること、主なる神様と人間との間を保ってくださる「仲保者」であること、また「御子」が創造の始めより主なる神様の啓示に参加し、主なる神様と人間とを和解させる役割があることが示されます。そこにはギリシア的ユダヤ教の知恵の思想の影響、またヨハネによる福音書にも類似する理解があります。

ヘブライ人への手紙は、冒頭からこのように、「御子（イエス・キリスト）」に三つの役割があることを示しています。「啓示者」、「万物の相続者」、「万物（世界）の創造者」という役割です。3節は、そのことを「御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の現れであって、万物をその力ある言葉によって支えておられます。そして、罪の清めを成し遂げて、天の高い所におられる大いなる方の右の座に着かれました」と語りますが、この部分は旧約続編「聖なる天から知恵を遣わし、あなたの栄光の玉座から知恵を送ってください。知恵が私と共にいて働き、あなたが何を喜ばれるのかを私が知ることができるよう」（知恵の書9：10）と類似しているようにも思えます。しかし、ヘブライ人の手紙は、御子（イエス・キリスト）とは、知恵のような抽象的存在ではなく、まことの人という主なる神様の完全な見える表現であり、今も働いており、更にその終わりの時、その御子の業が、罪のきよめの業であり、それを成し遂げられると語っており、主なる神様を知るための知恵という存在をはるかに超えていることを示しているのです。

3節にある「罪のきよめの業」、この業が御子（イエス・キリスト）の祭司としての業です。しかし、罪のきよめのための御子の犠牲（キリストの犠牲）という概念は、『聖書（旧約・旧約続編）』から学んだ事柄ではなく、イエス様の生涯を認識した人々の証言であり、その証言を語り続けるのが教会にほかなりません。わたしたちもその教会の一つです。

主なる神様が啓示されるという基本は、時代を超えて不変です。それゆえに、その言葉を聞くということも変わってはならないのです。わたしたちは、「御子」が「罪の清めを成し遂げて、天の高い所におられる大いなる方の右の座に着かれました」と信じているからです。つまりわたしたちの「今」は、「終わりの時」でもあると自覚することが重要なのです。これはヨハネによる福音書の主張と同じです。それゆえ、わたしたちにとって「今」とは、どれほど悲しみや苦しみが深い時代だったとしても、同時に「時が満ちて」救いに入った時代でもあるのです。だから希望がなくなるのです。

今年もクリスマスをお祝いできました。今年も特別な恵みがあったひと時でした。もし、そうであったならば、御子の贖いによる救いが、今年も改めて明確になったということにほかなりません。世界に悲しみがあったとしても、決して揺るがされることなく、まことの平和の完成を待ち望み、希望をもって歩み続けたいと思います。